The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	舶載三角縁神獣鏡の製作年代
Author(s)	福永, 伸哉
Citation	待兼山論叢. 史学篇. 1996, 30, p. 1-22
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/48047
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

舶載三角縁神獣鏡の製作年代

福 永 伸 哉

1　問題の所在

三角縁神獣鏡は前方後円墳成立とともに出現し、古墳時代前期を通じて列島各地の有力古墳から副葬品として出土する。したがって、前方後円墳創出に深く関わった初期大和政権の成立過程および勢力伸張過程を解明する手がかりとして、重要な役割を果たしてきた。とくに、「同笵鏡」の分有関係の丹念な分析によって初期大和政権の成立、発展過程を復元した小林行雄の研究は20世紀後半の日本考古学においてもっともすぐれた成果の一つにあげることができる（小林1957）。

この三角縁神獣鏡のなかに、魏の景初３（239）年、正始元（240）年に製作されたという銘文を刻むものがあることはすでに周知の事実である。考古資料の製作年代については、紀年銘資料を基準に考えるという方法はもっともオーソドックスなものであり、これを信じるとすれば、三角縁神獣鏡についても、あらためてその製作年代を問題にする必要はないようにもみえる。しかし、筆者には近年の三角縁神獣鏡をめぐるさまざまな議論の中で、もう一度この問題を整理しておく必要があるように思われる。それは以下の２つの理由による。

一つは、この三角縁神獣鏡の製作年代が景初３年、正紀元年などの紀年とは直接関係ないとする見解が示されていることである。たとえば、森浩一は「景初三年や正始元年という年号は製作年代を示しているのではなく、

その年号より後に，鏡を製作させた人物ないし集団が、何らかの意味をこめて書いたもの」であり、その製作年代については「弥生時代の墓からは出土せず、古墳から出土している」状況を勘案して、「4世紀になってからの製作」という考えを述べている（森1990、p.40)。また、小山田宏一は、景初3年、正始元年三角縁同向式神獣鏡の製作年代こそ239～240年と認めるものの、その他の「舶載」三角縁神獣鏡については倭国内において3世紀第4四半期以降に製作されたものと理解している（小山田1993、1994、1995)。両氏の立論の根拠や考察方法は大きく異なるが、三角縁神獣鏡を邪馬台国勢力の遣使に対して中国王朝から与えられた「卑弥呼の鏡」とは切り離し、より後の鏡としてとらえる立場は共通している[1)]。

いま一つの理由としては、近年の舶載三角縁神獣鏡自体の型式研究の進展により、ある程度長期の製作期間幅を想定するというあらたな理解が生まれてきたために、製作年代の再検討が必要になったことがあげられる。

この種の鏡の型式研究の基礎を築いた小林行雄は1979年までの段階で、舶載三角縁神獣鏡を複像式、単像式、さらに単像式のうちの波文帯鏡群という3者に分け、それを製作時期の違いとしてとらえる考えを明らかにした[2)]。小林は別の機会に、三角縁神獣鏡の製作期間は「10年前後」という見解を示していることから、景初3年を起点とするごく短期間の内にすべての三角縁神獣鏡製作が完結したとの理解に立っていたと思われる（小林1983)。そして、250年頃までに製作を終えた三角縁神獣鏡が、4世紀の前期古墳[3)]から出土する点については「卑弥呼の時代に輸入された三角縁神獣鏡は、その後のある時期にいたって、ようやく、大和の某所の保管場所からとりだされて、各地の首長に分配されることに」なったと解釈して、理論的整合をはかった（小林1959a、p.70)[4)]。

これに対して、近年の研究においては、舶載三角縁神獣鏡には少なくとも4～5の製作段階があり（岸本1989、新納1991)、その時間幅について

も約半世紀前後を見積もろうとする新たな枠組みも示されつつある（岸本1993、澤田1993、福永1994ｂ）。また、こうして分けられた４～５段階の三角縁神獣鏡が大きく順序を乱すことなく一古墳の副葬鏡群の組み合わせを構成していることも確実になってきた。さらに、弥生時代後期の暦年代が大きく遡りつつあること（それは古墳出現年代の引き上げにも直結する）も小林以後の重要な関連要素である。こうした研究状況の展開は、三角縁神獣鏡の入手、配布が連続的であり、それが古墳時代前期の政治的動向ともよりダイレクトに結びついていることを示唆する方向へ向かっているように思われる。

しかし、製作起点となる紀年鏡が存在し，型式変化の方向も明らかになり、おおよその製作時代幅が考定されたといっても、それは考古学的考察としては三角縁神獣鏡という特殊な鏡の中でのみ完結した年代観という側面が強い[5]。他形式の鏡の年代との比較研究が十分ではないのである。

ただ、大陸において依然として三角縁神獣鏡が１面も出土していないことは、他形式の膨大な出土資料との比較検討を阻んでいる大きな原因でもある。また、そもそも舶載三角縁神獣鏡が本当に魏において製作されたものであるのかという点についても、近年中国側研究者から強い疑義が唱えられている（王1992）。

前置きが長くなったが、小稿においては、舶載三角縁神獣鏡製作年代について、三角縁神獣鏡の紀年から一旦離れて、他形式の中国鏡との比較検討を通じて整理する。筆者は「鈕孔形態」や「外周突線」などの独自の視点で三角縁神獣鏡と極めてつながりの深い特異な中国鏡の一群をすでに抽出している。ここでは、そうした特異な関連鏡群の年代から逆に三角縁神獣鏡のそれに迫るとともに、さらにいくつかの資料を示しながら、製作年代幅を持つ三角縁神獣鏡と他の中国鏡との関連のあり方を探ってみたい。

2　三角縁神獣鏡関連鏡群の年代

（1）　唐草文帯を持つ鏡群の年代

三角縁神獣鏡のなかには内区外周に文様帯を持つものがかなりある。逆に中国鏡全体からいえば、この部分に文様帯を有する事例はきわめて少数であり、円圏規矩鏡などごく一部のものにほぼ限られている。

こうした少数例のなかに、唐草文帯をもつものがある。いっぽう、三角縁神獣鏡においても10種類の唐草文帯鏡が確認されており、唐草文は文様面から双方の比較ができる数少ない要素である[6]。

まず、三角縁神獣鏡にみられるものときわめて類似する唐草文を有する中国鏡としては、ロイヤルオンタリオ博物館所蔵の円圏規矩四神鏡（図１―ａ、図２―１、以下オンタリオ鏡と呼称：梅原1933）と『巖窟蔵鏡』所収の円圏規矩四神鏡（図１―ｂ、図２―４、以下巖窟鏡：梁1940～42）があげられる。オンタリオ鏡のものは１単位の文様中央を折り返して表裏反転させるとちょうど重なり合うような均整のとれたＳ字唐草文、巖窟鏡のそれは天地を異にする双頭渦文２個を横につないだような、やはりＳ字唐草文である。ここではかりに前者を唐草文①，後者を唐草文②と呼び分けておく。三角縁神獣鏡との関連でいえば唐草文①は天王日月唐草文帯四神四獣鏡（目録：44、図２―２）[7] や唐草文帯二神二獣鏡（目録：90）などと共通し、唐草文②は唐草文帯三神二獣鏡（目録：201、図２―５）のものと類似する。

では、オンタリオ鏡、巖窟鏡の年代はどのように推定できるであろうか。

これら２面の鏡には類似する玄武像が描かれている。その特徴としては、

1. 亀の背の部分にはその輪郭線に沿うように二重弧線を３単位施した亀甲表現がある
2. 亀の腹部には同じく亀甲模様を表したとみられる台形文様が認められる

a　オンタリオ鏡

d　大営村鏡

b　巌窟鏡

e　景元４年鏡

c　椿井鏡

f　青龍３年鏡

図１　三角縁神獣鏡の関連鏡

1 オンタリオ鏡（唐草文①）　2 三角縁神獣鏡（目録44：唐草文①）　3 景元４年鏡

4 巌窟鏡（唐草文②）　5 三角縁神獣鏡（目録201：唐草文②）　6 三角縁神獣鏡（目録76）

図２　唐草文の比較

3.足はくの字に折れ曲がる合計４本の線で表す

4.蛇の上半部分は亀の背から現れたのち、頭部の上方から回り込んで喉下に達する

などの点があげられる。

じつは、こうした表現を持つ玄武像は中国鏡のなかでもきわめて稀なものであり、筆者が現在までに確認しえたものとしては、これら２例に、京都府椿井大塚山古墳出土方格規矩四神鏡（図１―ｃ、以下椿井鏡）、北京市大営村８号西晋墓出土方格規矩四神鏡（図１―ｄ、以下大営村鏡：黄ほか1983）を加えた４例しかない（図３）。これらはごく限られた工房でつながりのある工人たちによって製作された可能性が高いと考えられる。

ただ、細部に目をやれば、これら４例の玄武像にも違いは認められる。そして、これは工人の違いであると同時に、ある程度の製作時期の前後差を反映しているのではないかと推測されるのである。

まず、亀の頭部が表されているか否かによって、椿井鏡・オンタリオ鏡と巌窟鏡・大営村鏡を区別することができる。後者は前者に認められた頭部をちょうど省略した表現となっている。つぎに注目できるのが亀の腹部にある台形文様である。椿井鏡においては台形文様は背部にある二重弧線の亀甲模様表現と調和して存在しているのに対して、オンタリオ鏡ではかなり硬直した二重の台形文様となっている。巌窟鏡になると二重弧線の亀

甲模様とはまったく無関係の図形的なものになり、大営村鏡に至っては台形文様は亀の体部から飛び出してしまったような形となり、もはや本来の亀甲模様からは著しく転化している。また、足の表現をみると、椿井鏡、オンタリオ鏡、巌窟鏡においてはくの字に折れる細線を前後に2本ずつ配置し、前後の足を描き分けていたが、大営村鏡では台形文様の下部に等間隔で1本ずつ並べており、もはや動物の足としての合理性を失っている。

さて、これら4例のなかでもっとも古い玄武像を持つ椿井鏡の年代を考えてみよう。その手がかりは、四神像の位置である。厳密にいえば椿井鏡には玄武および白虎しか表されていないが、それらは方格各辺の中央にあるＴＬ字文の向かって右側に位置している。こうした配置は数ある方格規矩四神鏡のなかでも例外中の例外であり、同様の配置例としては、京都府大田南5号墳出土の青龍3（235）年方格規矩四神鏡（図1―ｆ）があげられる程度である。青龍3年鏡の四神像表現はさらに特異で他に例を見ないが、正Ｌ字文、長方形鈕孔、鈕孔方向などの点で椿井鏡などと共通する「規矩鏡の特異な一群」（福永1992ａ）に含まれる。このような状況からみて、椿井鏡の年代は青龍3年に近い時期を考えて大過ないものと思われる。

年代の情報を持ついま一例は、大営村鏡である。すなわち、大営村鏡が副葬されていた8号磚室墓に使用された磚に「泰始七年夏四月作磚」という銘がみられることが重要な手がかりになる。墓室内部の埋葬人数や追葬の

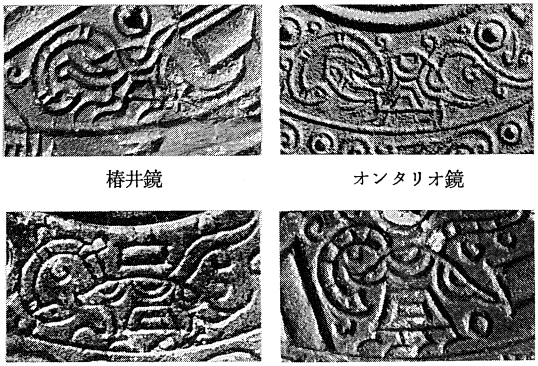

図3　玄武像の比較

有無、副葬品検出状況は明らかでないが、ここに刻まれた西晋泰始7（271）年という紀年が墓の築造年代を示すとしたら、大営村鏡の下限年代を理解する手がかりとなる。

やや不確実ではあるが、椿井鏡と大営村鏡の製作年代をこのように理解すると、これらの間に位置づけられるオンタリオ鏡、巖窟鏡の年代幅はおおむね240年代～260年代のなかにおさまる可能性が高いと考えられる。

ところで、かつて田中琢は唐草文②と魏の景元4（263）年円圏規矩鏡（図1—e）の唐草文との類似を指摘した（田中1985）。確かに両者から受ける印象はよく似ているが、景元4年鏡のそれは逆S字を骨格とすること、本体から枝別れした渦文の巻き方向が唐草文②とは逆になるなどの違いも認められる。しかし、このような簡素な唐草文帯は他にはあまりみられないものであり、少なくともこの紀年によって唐草文②の使用時期を推定する手がかりになると考えられる。上述の年代幅とも矛盾する点はない。

（2） 外周突線を持つ鏡群の年代

外周突線と筆者が呼ぶのは、3帯構成の外区文様の最外周に加えられた1条の突線のことである。舶載三角縁神獣鏡には、その古相のものを中心にかなりの類例が認められるが、逆に他の中国鏡においてはきわめて限られた文様要素である。

外周突線を有する少数の中国鏡としては、直径が14cmを超える斜縁二神二獣鏡類、L字文が通例と逆の正L字となる特異な規矩鏡などがあげられる。前者は外周突線の出現率が9割を超えており、外周突線の文様手法は本来この種の鏡を製作していた工人に特有のものであった可能性を示唆している。その実際の製作時期を細かく限定することは現状では資料的に困難であるが、最初期の三角縁神獣鏡にすでに認められる外周突線の「本拠地」と目されることからみて、製作の盛期は三角縁神獣鏡よりやや

先行するものと考えておきたい[8]。外周突線手法の上限は斜縁神獣鏡の製作年代ともかかわり、にわかには決し難いが、下限年代については規矩鏡を手がかりにやや詳しく検討することができる。

外周突線を持つ異例の規矩鏡のうち、確実な中国出土例としては、遼寧省遼陽三道壕1号墓出土方格規矩鳥文鏡（図4、以下三道壕鏡：東北博物館1955)、河北省鹽山県西田寨村出土円圏規矩鳥文鏡（図5、以下西田寨村鏡：劉、王1992)、そして前出の大営村鏡の3面である。大営村鏡は第1節で述べたように玄武像の崩れ方からみてこの種の鏡の中ではかなり後出する要素を持っている。西田寨村鏡は、内区外周に唐草文②からなる文様帯を有している。鳥文の表現も前出の巖窟鏡に酷似していることからみて、ほぼ同時期に同一工房で製作された可能性が高い。巖窟鏡の玄武像を介して考えると、大営村鏡よりわずかに先行するものと判断できよう。三道壕鏡については実年代を細かく限定することは難しいが、鏡を出土した壁画墓の年代は漢末から西晋の間に考えられている（東北博物館1955)。このほかに正式な発掘調査による出土資料ではないが、オンタリオ鏡においても外周突線と唐草文①が共存している。

こうした規矩鏡の諸例をみると、外周突線の表現手法は唐草文①、唐草文②の使用期を含んで270年代近くまでは行われていたと考えられる。外周突線を持つ類例自体が乏しく、下限年代を確定できるというわけにはいかないが、三角縁神獣鏡を除いて現在までに知られている資料の中では、大営村鏡が相対的に新しく位置づけられる可能性が高い。

（3）　長方形鈕孔を持つ鏡群の年代

ほとんどの三角縁神獣鏡にみられる長方形鈕孔という特徴は、他の中国鏡には逆にあまり認められない要素である。筆者はこうした少数派をなす長方形鈕孔の類例の中に三角縁神獣鏡の系譜を解く手がかりがあると推定

しているが、その年代を考えるにあたっては、紀年鏡が参考になる。

結論的にいえば、こうした特徴は魏の紀年鏡に多く認められる。1994年に出土した青龍3年鏡を加えてこれまでに確認されている明らかな魏の紀年鏡は23面を数える[9]が，このうち少なくとも10面は長方形鈕孔を有している。このなかから、呉で造られたと指摘されている黄初年鏡、さらに三角縁神獣鏡およびそれらと同じ契機でもたらされたと筆者が考える景初3年画文帯神獣鏡、景初4年盤龍鏡を除いたうえで、長方形鈕孔を持つ紀年鏡を示すと、青龍3（235）年方格規矩四神鏡、甘露4（259）年獣首鏡、甘露5（260）年獣首鏡、景元4（263）年規矩鏡などがあげられる。

また、長方形鈕孔は前節で述べた大営村鏡、三道壕鏡、西田寨村鏡のいずれにも認められる[10]。ちなみに、大営村では同じ墓群中の別の磚室墓から出土した多くの鏡に長方形鈕孔が認められる。たとえば『文物』（1983年10期）に報告されている4号墓出土鳥文鏡、5号墓出土位至三公鏡、さらには通例では半円形鈕孔となる2号墓出土内行花文鏡さえも長方形鈕孔を有しているのである。詳しくは別稿を用意するが、こうした事実は長方形鈕孔の手法の系譜や盛行時期を知る重要な手がかりである。

これまでに判明した紀年鏡や築造年代が推測できる墓葬出土例から判断すると、長方形鈕孔を持つ鏡群は少なくとも230年代～260年代頃には製作が行われていたと考えられる。そして、今後西晋代の資料に対する検討が進めば、その幅がさらに広がる余地も十分に考えられる[11]。

4　三角縁神獣鏡の諸段階と製作年代

前章においては、三角縁神獣鏡と関連する文様要素や形態的特徴が他形式の鏡において認められる例をあげ、大ざっぱではあるがその年代を類推してみた。本章では、三角縁神獣鏡の型式的段階とこれらの諸要素の相関関係を整理することによって、三角縁神獣鏡の製作時期の幅を探ってみた

い。

舶載三角縁神獣鏡は文様要素、デザインや鋳型製作の巧拙などの差異が個体間で著しく、その型式的把握は容易でないが、筆者は現時点では型式的に次の4段階（将来的にはB段階を2分して5段階に整理できる可能性が高い）に分けてとらえる考えを持っている（福永1994b、1995）。

A段階　景初、正始の紀年鏡、および岸本直文による神獣像表現分類①⑦を主体とするもの

B段階　A段階のものと捩座乳を持つものを除いた内区4分割タイプのもの

C段階　捩座乳を持つもの

D段階　波文帯鏡群を主体とするもの

この段階設定はまだ完全な成案に達したものではなく、いくつかの資料については帰属段階の判定に迷うものもあるが、同一古墳における組合せ関係などの検討からみても大きな変遷の枠組みとしてはほぼ合理的と考えうる。

さて、三角縁神獣鏡と唐草文との関連についていえば、第2章でとりあげた唐草文①、唐草文②と共通するものは、B段階およびC段階の三角縁神獣鏡にみられることを指摘できる。A段階においても日月日日唐草文帯四神四獣鏡（目録：76、図2―6）が存在するが、この鏡の唐草文帯は半肉彫り的な部分が多いことから、やや遡る可能性が考えられる。一方、D段階の三角縁神獣鏡は波文帯を有することでつよいまとまりを示す一群であり、唐草文帯の例はみられない。唐草文①、唐草文②を持つオンタリオ鏡、巌窟鏡の年代が、玄武像の比較検討によって240年代～260年代に比定できるとすると、舶載三角縁神獣鏡全体の年代としてはこの前後にA段階とD段階を加えて幅を広げた値を想定することが可能となる。

つぎに、外周突線について整理してみよう。

外周突線は景初3年、正始元年などの紀年鏡をはじめ、四神四獣タイプの約半数に施されているのに対して、内区を6分割する三神三獣タイプにはあまり認められないという特徴がある。岸本直文による神獣像表現の分類との関連でいえば、相対的に古相に位置づけられる表現①や表現⑦においてその出現頻度が特に高い。

上述した4段階分類に照らし合わせると、外周突線の出現率はA段階83%、B段階35%、C段階38%、D段階5%という値になり、D段階においてはすでにほとんどこの文様手法が用いられなくなっていることをうかがわせる。外周突線という特徴は図像の主要な構成要素というより、製作工人集団のある種のクセのようなレベルの問題であろう。長方形鈕孔という点ではそれ以前と変わらぬ特徴を持つD段階の三角縁神獣鏡製作が、それまでとはまったく別系統の工人群の手によると考えることは難しい。このD段階に至っての外周突線の激減はむしろ、同一系譜の工人群の製作ではあるが、その製作時期がすでに外周突線の手法が衰退した後にくだることを示唆していると考える方が合理的である。前章で検討したように、現状において他形式鏡の資料が示す外周突線手法の下限が270年前後とすると、D段階の製作時期はそれよりも後という推測が成り立つのである。

長方形鈕孔の手法については、紀年鏡による確実度の高い見積りによると、230年代～260年代に用いられていたことは明らかである。そして、大営村鏡やさらには，仿製三角縁神獣鏡にも認められるため、下限は4世紀に下るものと考えられる。

以上のようないささか迂遠な手続きによって、三角縁神獣鏡の諸段階と製作時期の関係はおおむね次のように整理できよう。すなわち唐草文①②の共通性によって、三角縁神獣鏡B段階，C段階がほぼ240年代～260年代に比定でき、A段階についてはより古相の唐草文が用いられていることからこれより若干遡らせて考える余地がある。唐草文①②が用いられないD

段階は、その流行後の製作とみて270年代以降の可能性を考えておきたい。外周突線の検討からは、それがほとんど消滅するD段階の諸例は270年よりも後の製作であるという結論に達した。そして、長方形鈕孔の手法は230年代～260年代の紀年鏡に認められることから、三角縁神獣鏡の製作時期がこの時期と明らかに重なりを持っていることを指摘できよう。これらをまとめると舶載三角縁神獣鏡はほぼ230年代ころに製作が始まり、最終段階の製作は270年代以降に下るという理解に至るのである。

このように関連する他形式鏡群との比較検討による限り、三角縁神獣鏡にみられる景初3年、正始元年という紀年は製作年代を示すものとして無理なく理解できるのである。型式的にみてこれらは三角縁神獣鏡においてはごく初期のものである。三角縁神獣鏡は景初3年の卑弥呼による遣使への下賜品としてまさに景初3年に製作が開始された鏡であり、いわゆる「魏志倭人伝」の銅鏡百枚の最有力候補と考えてなんら矛盾はない。そして、その製作期間も半世紀前後の長期に見積ることが可能である。

中国北方の鏡生産との関連が認められるにもかかわらず、中国大陸においては出土例がなく、しかも製作時期が景初3年を起点とする半世紀前後ということになると、三角縁神獣鏡の性格については、邪馬台国勢力および初期大和政権が魏晋王朝との朝貢関係によって独占的に入手した「特鋳鏡」という説明以外にはありえないように思われるのである。

5　舶載三角縁神獣鏡の諸段階と製作地

三角縁神獣鏡の製作地論争については、あらためて説明するまでもない。舶載三角縁神獣鏡を魏晋鏡とする筆者の立場はいくつかの機会に明らかにしている（福永1991、1994a）。ただ、筆者のように舶載三角縁神獣鏡の製作に4ないし5段階があり、製作期間も半世紀前後まで引き延ばして捉えようとする場合には、その一つの段階のみをとりあげて出自を裏付けるだ

けではなく、各段階にわたって他形式の中国鏡との関連を指摘する努力を続ける必要がある。

この場合、画象鏡や神獣鏡などとの一般的な図像モチーフの類似点をあげるより、三角縁神獣鏡に特有に認められる異例の要素が他の中国鏡とどのような関係にあるかという観点を重視すべきであると考える。ここでは、銘文について考えてみよう。

三角縁神獣鏡に特徴的な銘文の一句に「銅出徐州」がある。この句は三角縁神獣鏡においては、目録番号79の王氏作四神四獣鏡や同37の吾作四神四獣鏡などA段階およびB段階の一部のものに認められる。中国鏡のなかではこの句はたいへん稀であり、前述の遼寧省遼陽三道壕1号墓から出土した方格規矩鳥文鏡において確認されているのみである。王仲殊はこの三道壕鏡の存在を紹介しつつも、それがただ1面であり、しかも三角縁神獣鏡と関連が考えられる画象鏡や神獣鏡ではないこと、徐州の地がかならずしも三国時代魏の領域であるとはいえないことなどから、三角縁神獣鏡を魏の鏡生産と結び付けることはできないと考える（王1985）。

しかし、三道壕鏡には外周突線と長方形鈕孔という三角縁神獣鏡に特徴的な手法が認められる（図4）。しかも、右L字文をもつ特異な規矩鏡の一群に含まれるものである。三道壕鏡は、三角縁神獣鏡以外で「銅出徐州」銘を持つ唯一の例であるが、銘文のほかにも鏡式の違いを越えて三角縁神獣鏡と共通する要素を有している点できわめて重要な資料である。三角縁神獣鏡A段階、B段階は「銅出徐州」銘の存在によっても中国鏡とたしかに関連を持つことは明らかであり、なおかつその関連鏡が魏の領域で製作されたと考えられる規矩鏡であることは捨象できない事実である。

次に、C段階の三角縁神獣鏡と他の中国鏡との関連を考えてみよう。この問題を考えるうえでたいへん興味深い資料を紹介しておきたい（図6）。

この鏡は1972年9月に河北省易県で採集された方格規矩鳥文鏡である

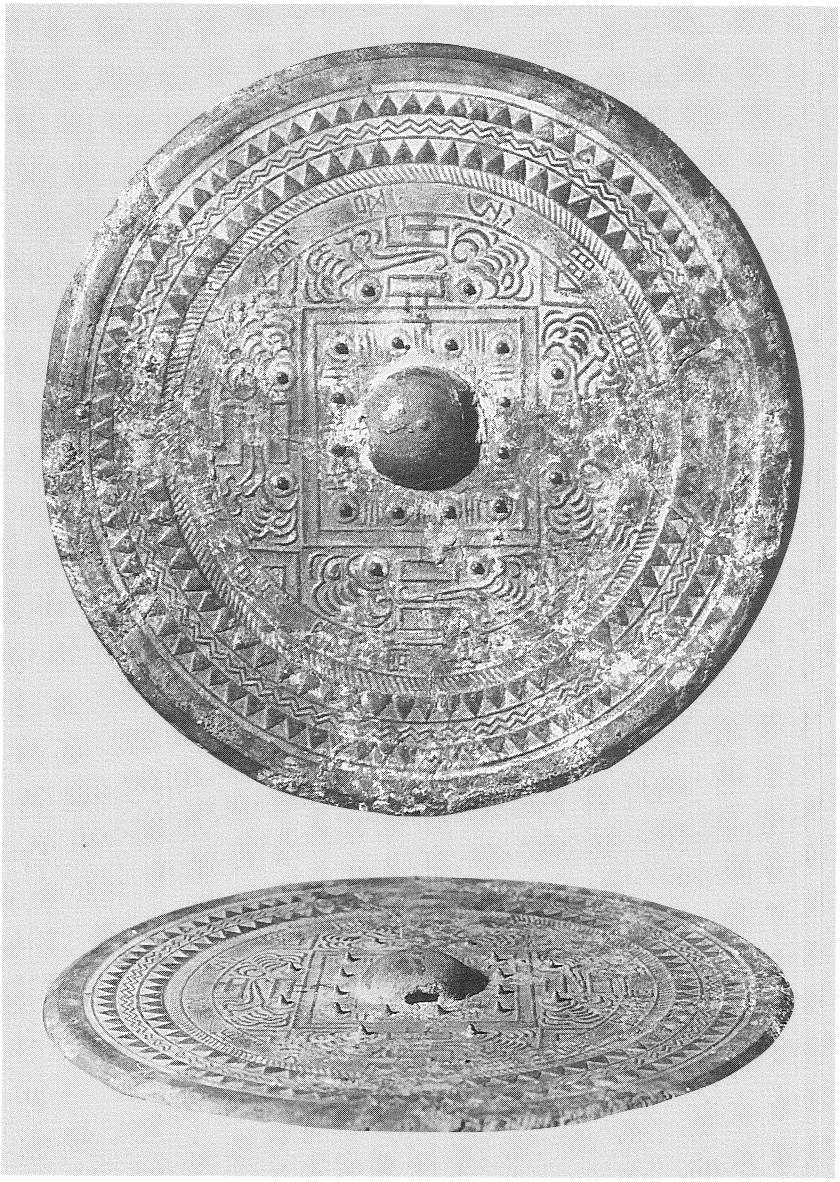

図４　遼寧省遼陽三道壕１号墓出土方格規矩鳥文鏡

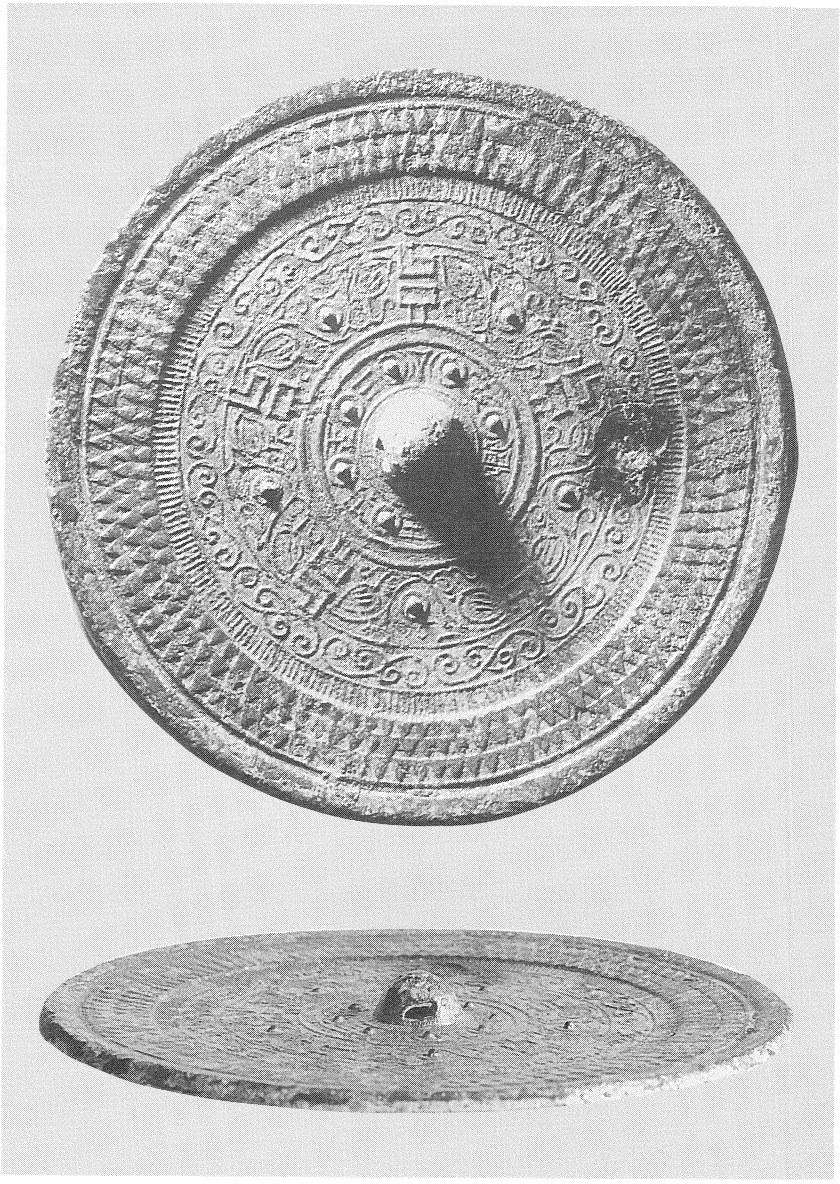

図５　河北省鹽山県西田寨村出土円圏規矩鳥文鏡

図６　河北省易県出土方格規矩鳥文鏡

（呉1996）。直径 15.4 cm、重さは 410 g をはかる。外区は素文の縁部とやや幅のある圏帯の間に鋸歯文と一条の突線を施す。内区外周には銘帯を有し、時計回りに「吾作明鏡甚独奇保子宜孫富無訾」という銘文を刻む。内区はＴＬＶ文の間に８羽の鳥文を配するが、その鳥像は特徴的であり、椿井鏡にみられるそれと通ずるところがある。Ｌ字文は正Ｌ字である。方格内は小乳の間を２～３本の短線で埋めている。公表された拓影からは鈕孔の情報は読みとれないが、Ｌ字文の向きや特徴的な鳥文などからみて、特異な規矩鏡の一群に含めてとらえてよいであろう。

本例で特に注目されるのはその銘文である。中国鏡の中ではきわめて特異な銘文であるが、じつはこれとまったく同じものが筆者の分類でC段階に属する静岡県松林山古墳出土の三角縁二神二獣鏡（目録：101）にみられるのである。筆者の知る限りでは、三角縁神獣鏡と同一の銘文が刻まれた中国鏡として初めての確認例になる。このような特異な銘文が一致することからみて、両鏡は製作工人レベルできわめて深い関係を有していたといわざるをえない。

こうした銘文の比較に加えて、前述した唐草文帯の類似などを勘案すると、舶載三角縁神獣鏡は少なくともA～C段階までは他形式の中国鏡とわずかではあるが、しかし重要なつながりが継続的にたどれるのである。工人が倭と大陸の間をその都度行き来して製作にあたったというような極端な想定を別にすれば、それらがすべて大陸において製作されたと理解するのがもっとも自然である。

これに対してD段階の三角縁神獣鏡と中国鏡を結びつける確実な証拠は現時点では認められない。ただ、ここにあげた松林山鏡は、内区に博山炉を描き、外区には獣文帯三神三獣鏡（目録：114、115）にみられるような獣文帯を配するなど、D段階につながっていくいくつかの要素をすでに持っている。また、D段階の諸例と仿製三角縁神獣鏡の間には鋳造技術の点でも基本的な差異が存在している可能性が高く（福永1992b）、やはりそれらについても中国大陸における製作を考えるのが妥当であろう。

その製作地はいまだ確定できないものの、三角縁神獣鏡と関連のうかがわれるこれら中国鏡の多くが、現在の河北省、北京市、遼寧省といった中国でも東部の地域から出土していることは示唆的である。後漢～三国時代の華北の銅鏡生産は、首都洛陽付近のそれを念頭において語られることが多いが、三角縁神獣鏡という特異な鏡から逆にたどると、東部周辺地域において形式的にやや異例の鏡を製作していた別の製作工人が存在した可能

性が浮かび上がってくるのである。もっとも、そこが三国時代の魏、西晋の領域内であることはいうまでもないことである。

6 む す び

舶載三角縁神獣鏡の製作年代について、A段階は紀年銘のとおり239～240年、B、C段階は240年代～260年代、D段階は270年代以降という値を示してみたが、もとより少ない手がかりからの不確実な想定であることは否めない。ただ、各古墳における複数の三角縁神獣鏡の組み合わせ関係を整理すると、やはり隣り合う段階のものがセットをなす傾向が確かに認められる（福永1994b）。型式論の原則からいえば、こうした状況はA～Dという順序で製作時期差があり、かつ、その製作時期の順序を反映する形で分布が形成されたことを示している可能性が高いと解釈できよう。

三角縁神獣鏡を魏晋王朝が邪馬台国（および初期大和政権）の遣使に対して特別に製作して与えた特鋳鏡とみるなら、その入手契機はおのずと限定されることになる。いわゆる魏志倭人伝や晋書には、景初3（239）年、正始4（243）年、正始8（247）年頃、泰始2（266）年の4回にわたって倭からの朝貢があったことが記されている。上述した三角縁神獣鏡の年代観とあえて関連づけるとしたら、第1回目にA段階、第2回目、第3回目にB段階のものを入手し、やや型式的に開きが感じられるC段階のものが266年の朝貢時に得られたものという一案を提示できようか。さらに製作年代がそれ以降にくだる可能性が高いD段階のものは、西晋武帝の治世において、国名は記されていないものの東夷から多数の国が入貢した270年代後半から290年頃の間に下賜されたものとみておきたい[12]。

執筆にあたっては次の先生方、諸機関より資料調査の便宜と有益な御教授を得た。負うところを記し、感謝の意を表したい。徐光輝、曲楓、張文瑞、斉心、

陳光、程瑞秀、藺新建、孫海、徐海、王志斌、袁秉成、趙子英、呉克賢、名児耶明、森下章司、鹽山県文物保管所、撫寧県文物保管所、遼寧省博物館、北京市文物研究所、京都大学文学部博物館、五島美術館、京都府立丹後郷土資料館（順不同、敬称略）。

注

1) 小山田は景初３年鏡、正始元年鏡については魏が卑弥呼に下賜した鏡と認める。しかし、氏はこれらを、前期古墳から出土する舶載三角縁神獣鏡とは分離させてとらえるべきであると主張する（小山田1993、pp.253-258）。
2) 小林は79年以前からこのような理解は持っており、したがって、波文帯神獣鏡に対しては終わりに近い同笵鏡番号を与えたと述べている（小林1979、p.60）。
3) 小林は古墳時代開始期については、最初期の京都府椿井大塚山古墳の築造年代を280年～350年の幅におさまる蓋然性が高いとした（小林1961）。また、小林1959ｂ文献においては古墳時代開始を「３世紀末ないし４世紀のはじめ」と表現した。
4) また、近年中国鏡の研究を精力的に推進している岡村秀典も「邪馬台国の朝貢が文献上で確認できる20年程度」という短い製作時期幅を想定している（岡村1996）。
5) その意味では、結論には同意できないものの小山田による画文帯同向式神獣鏡と三角縁同向式神獣鏡の比較研究は評価できる（小山田1993）。
6) 三角縁神獣鏡と他の中国鏡の唐草文の類似についてはすでに田中琢によって着目されている（田中1985, pp.58-60）。
7) 三角縁神獣鏡の鏡式名のあとに付した目録番号は、三角縁神獣鏡目録（京都大学考古学研究室1989）において与えられた番号である。
8) 外周突線を持つ斜縁神獣鏡のうち、相対的に大形の二神四獣鏡など６分割のものは、三角縁神獣鏡の一部と製作時期が重なる可能性を考えている。
9) このほかに、『歴代銅鏡紋飾』（呉編1996）No.69 にある「五年二月四日右尚方師作」で始まる銘文を持つ獣首鏡が魏の甘露５年獣首鏡である可能性が高いと考える。
10) 1996年８月に北京市文物研究所、遼寧省博物館、鹽山県文物保管所にて実見した。
11) 260年代以後の長方形鈕孔鏡群の消長は不明瞭である。筆者自身、華北で製作されたと考えられる西晋鏡の鈕孔形態はほとんど未検討である。
12) 古墳時代初期の築造と考えられる岡山県湯迫車塚古墳、京都府椿井大塚山

古墳などには少量であるがC段階の三角縁神獣鏡が含まれている。ここに示した年代観が大きく間違っていないとすれば、これらの古墳はC段階の三角縁神獣鏡の配布が始まってまもなく築造されたと理解することもできる。なお、兵庫県権現山51号墳、同西求女塚古墳の三角縁神獣鏡はA、B段階のもののみで構成されている。このことはこれらの築造がC段階配布以前、すなわち260年代に遡る可能性を示唆しており、古墳時代開始年代を考える一つの手がかりになると考えられる。

参考文献

梅原末治　1933『欧米蒐儲支那古銅精華』鏡鑑部

劉紅衛、王智賓　1992「河北鹽山発現曹魏五乳規矩鏡」『文物春秋』1992-2

王仲殊　1992『三角縁神獣鏡』（西嶋定生監修、尾形勇、杉本憲司訳）学生社

王仲殊　1985「日本の三角縁神獣鏡について」『三角縁神獣鏡の謎』日中合同古代史シンポジウム　角川書店

岡村秀典　1996「中国鏡からみた弥生・古墳時代の年代」『考古学と実年代』（第40回埋蔵文化財研究集会発表要旨集）埋蔵文化財研究会

岸本直文　1989「三角縁神獣鏡製作の工人群」『史林』第72巻第5号

岸本直文　1993「三角縁神獣鏡研究の現状」『季刊考古学』第43号　雄山閣

京都大学考古学研究室　1989『椿井大塚山古墳と三角縁神獣鏡』

呉　守明　1996『歴代銅鏡紋飾』（河北美術出版社）

小林行雄　1957「初期大和政権の勢力圏」『史林』第40巻第4号

小林行雄　1959a『古墳の話』岩波書店

小林直文　1959b「古墳が造られた時代」『世界考古学大系』3　平凡社

小林行雄　1961「同笵鏡考」『古墳時代の研究』青木書店

小林行雄　1967『女王国の出現』（国民の歴史1）文英堂

小林行雄　1979「三角縁波文帯神獣鏡の研究』『考古学研究紀要』1　辰馬考古資料館

小林行雄　1983「三角縁神獣鏡をめぐって（講演記録）」（更埴市教育委員会1992『史跡森将軍塚古墳』に掲載）

小山田宏一　1993「画文帯同向式神獣鏡とその日本への流入時期」『大阪府立弥生文化博物館研究報告』第2集

小山田宏一　1994「3世紀の鏡――漢鏡7期の流入の始まりと三角縁神獣鏡との関係――」『倭人と鏡（その2）』（第36回埋蔵文化財研究集会発表要旨資料）埋蔵文化財研究会

小山田宏一　1995「副葬品」『季刊考古学』第52号　雄山閣

澤田秀実　1993「三角縁神獣鏡の製作動向」『法政考古学』19
田中　琢　1985「日本列島出土の銅鏡」『三角縁神獣鏡の謎』日中合同古代史シンポジウム　角川書店
東北博物館　1955「遼陽三道壕両座壁画墓的清理工作簡報」『文物参攷資料』1955-12
新納　泉　1991「権現山鏡群の型式学的位置」近藤義郎編『権現山51号墳』御津町教育委員会
福永伸哉　1991「三角縁神獣鏡の系譜と性格」『考古学研究』第38巻第１号
福永伸哉　1992ａ「規矩鏡における特異な一群――三角縁神獣鏡との関連をめぐって――」『究班』埋蔵文化財研究会15周年記念論文集
福永伸哉　1992ｂ「三角縁神獣鏡製作技法の検討――鈕孔方向の分析を中心として」『考古学雑誌』第78巻第１号
福永伸哉　1994ａ「仿製三角縁神獣鏡の編年と製作背景」『考古学研究』第41巻第１号
福永伸哉　1994ｂ「三角縁神獣鏡の歴史的意義」『倭人と鏡（その２）』（第36回埋蔵文化財研究集会発表要旨資料）埋蔵文化財研究会
福永伸哉　1995「西日本からみた東海の前方後方墳」『前方後方墳を考える』第３回東海考古学フォーラム
森浩一　1990「吉野ケ里から邪馬台国が見える」下『朝日ジャーナル』第32巻第２号
黄秀純ほか　1983「北京市順義県大営村西晋墓葬発掘簡報」『文物』1983―10
梁上椿　1940～1942『巖窟蔵鏡』（同朋舎1989年合本復刊　田中琢、岡村秀典訳）327番

本文に使用した写真のうち、椿井鏡、景元４年鏡、青龍３年鏡、三道壕鏡、西田寨村鏡は所蔵・保管機関のご協力を得て筆者が撮影した。大営村鏡の写真は北京市文物研究所より提供を受けた。他の写真は本文中に示した参考文献より引用した。

（文学部助教授）